

[災害統計]

車両系建設機械等の労働災害による死亡災害の推移と平成30年における発生状況

平成16年からの車両系建設機械及び高所作業車の労働災害による死亡者数の推移がグラフ1の折れ線グラフ、また機械の種類別の内訳が棒グラフである。

平成30年の死亡者数は48名であり、平成16年の98名と比べて、50名の減と約半減している。機械の種類別にみると、近年掘削用機械と締固め用機械の減少が顕著である。逆に解体用機械は、まだ件数は少ないものの増加傾向にある。また整地・運搬・積込み機械は減少率が少ない。

平成30年に発生した車両系建設機械及び高所作業車の労働災害による死亡者数は、前年の52名より4名減（7.7%減）となった。

機械の種類別・業種別の死亡者数は表1・グラフ2のとおりである。

機械の種類別では、「整地・運搬・積込み用機械」と「掘削用機械」に起因するものが、そ

れぞれ14名（29.2%）と圧倒的に多く、次いで、「解体用機械」が8名（16.7%）と続いた。

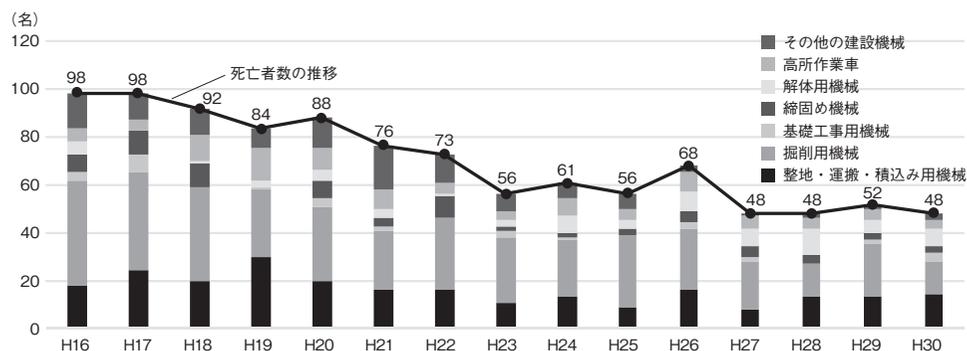
業種別にみると、建設業の37名（土木工事業25名、建築工事業10名、その他の建設業2名）が全体の約77%を占めており、これは例年同様の傾向である。

次に、機械の種類別・事故の型別に分類したものが表2・グラフ3である。

事故の型では、「墜落・転落」と「はさまれ・巻き込まれ」が12名（25.0%）、次いで「激突され」の10名（20.8%）、の順となっている。この上位3項目で全体の約71%を占めており、これも例年同様であった。

また、災害の発生概要をみると、ドラグ・ショベルでの揚重作業中によるものが散見され、これはクレーン機能付きの機械でも2件発生している。

[資料提供：厚生労働省]



グラフ1

車両系建設機械等の労働災害による死亡者数の推移

表1 車両系建設機械等の種類別・業種別死亡災害発生状況（平成30年）

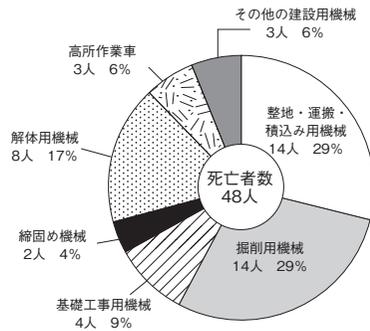
（単位：人）

業種 機械の種類	製造業	鉱業	建設業			運輸 交通業/ 貨物 取扱業	農林業/ 畜産業・ 水産業	商業	その他 の事業	計
			土木事業	建築工事業	その他の 建設業					
整地・運搬・ 積み込み用機械	0	0	9	0	0	0	0	1	4	14
掘削用機械	0	0	9	3	0	1	0	0	1	14
基礎工事用機械	0	0	3	1	0	0	0	0	0	4
締固め機械	0	0	1	1	0	0	0	0	0	2
解体用機械	0	0	1	1	2	0	2	0	2	8
高所作業車	0	0	1	2	0	0	0	0	0	3
その他の建設用機械	0	0	1	2	0	0	0	0	0	3
合計	0	0	25	10	2	1	2	1	7	48

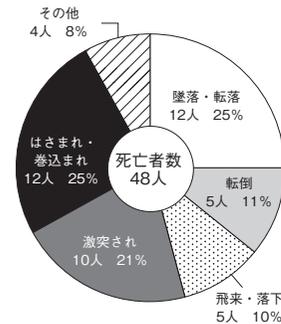
表2 車両系建設機械等の種類別・事故の型別死亡災害発生状況（平成30年）

（単位：人）

事故の型 機械の種類	墜落・転落	転倒	激突	飛来・落下	崩壊・倒壊	激突され	はさまれ・ 巻込まれ	その他	計
掘削用機械	4	1	0	0	0	3	6	0	14
基礎工事用機械	0	0	0	4	0	0	0	0	4
締固め機械	1	0	0	0	0	0	1	0	2
解体用機械	0	2	0	1	0	3	1	1	8
高所作業車	1	0	0	0	0	0	1	1	3
その他の建設機械	1	0	0	0	0	1	1	0	3
合計	12	5	0	5	0	10	12	4	48



グラフ2 機械の種類別



グラフ3 事故の型別